

## 「ニコデモ」

ヨハネの福音書 3:1~16

はじめに

3:1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。

ユダヤ人の指導者、パリサイ人ニコデモ。イエシュアは福音書の中で、幾度となくユダヤ人の指導者たちであるパリサイ人と対話されますが、このニコデモのように、個人名が記されているのは非常に珍しいケースです。ですからこのニコデモという人物に、何等かの意味があると考えべきです。



ニコデモ(נִקְדֵּמון)の名前の中にカーダム(קָדָם)「先に、前もって~する」という意味の動詞を見つけることができます。イエシュアは先に、前もって何かをなされたことをこのニコデモとの対話を通して示しておられると考えられます。

### 1. 夜

3:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなさるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」

ニコデモがイエシュアのもとに来た、正確には来させられた、です。聖書に記されている出来事はすべて偶発的に起こった事を記録しているのではなく、あるメッセージを表すために、神様によって意図的に起こされたしるしとしての出来事です。ですからただニコデモがイエシュアに会いたかったから起こった出来事ではありません。神様が何等かのしるしのためにニコデモを導いたのです。そしてそれは夜に行われました。ではなぜ夜だったのでしょうか。

神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日（創世記 1:5）

夜とは、もともと「やみ」のことです。ニコデモはやみの中でイエシュアに出会いました。これはニコデモにとってイエシュアは「やみの中に輝く光」であることを意味していると考えられます。

光はやみの中に輝いている（ヨハネ 1:5）

しかしニコデモはイエシュアを光ではなく、神の教師と捉えていました。

## 2. 水と御霊

3:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

「新しく生まれる」となっていますが、ヘブル語ではマアル(מעל)「上、上に」生まれる、もしくはマーコール(מקור)「源、泉」から生まれると訳されています。

3:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか。」

これを全く理解できないニコデモに対して、イエシュアは次のように言い換えて教えられます。

3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。」

上に生まれる、源に生まれる、水と御霊によって生まれるとはどういうことでしょうか？これにはまず水と御霊について知らなければなりません。ヘブル語で水はマイム(מים)、御霊はルアハ(רוח)です。この二つの言葉の語源となる出来事、つまり聖書で初めて扱われている箇所を見てみましょう。

### 創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

神様は天と地を創造された時、地はやみで何もありませんでした。そして神様は天におられる方ですから、神の霊は天にあり、そして水の上におられました。つまり水と、神の霊すなわち御霊は天地創造された当初から、天においてともにいる存在であったことが解ります。つまり水と御霊によって生まれるとは、天に生まれる、上に生まれることの言い換え表現であり、神様とともにいる存在として、天地創造の初めから、そのように生まれる、造られる、つまり定められていたということだと考えられます。

## 3. 思いのまま

3:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

肉は肉、霊は霊。肉として生まれたものは最後まで肉で、霊として生まれたものは永遠に霊です。変わることも変えられることもありません。すべては初めから決まっている、つまりすべての人間は、天地創造の前から、どのように生まれ、どのように生きるかが決まっているということだと思われま。ここにニコデモという名前に示されたカーダム「先に、前もって～する」という意味が表されています。つまり天地創造が起こる時点で「先に、前もって」決められていた事柄があること、そしてそれは3節と5節にあるように、神の国を見、そこに入ることができる者についての神様のお立てになったご計画についてであることが示されていると考えられます。

3:7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っはなりません。

この「不思議に思う」のヘブル語はターマ(תָּמָא)で「驚く、ぞっとする」という意味ですが、その語源となる出来事がエジプトの総理大臣になったヤコブの愛息子ヨセフの物語にあります。

彼らはヨセフの指図によって、年長者は年長の座に、年下の者は年下の座にすわらされたので、この人たちは互いに驚き合った。(創世記 43:33)



自分たちが奴隷商人に売り飛ばしたヨセフが、エジプトの総理大臣になっているなど思いもよらない兄弟たちが、自分たちの歳の順をヨセフが正確に知っていることに驚く場面でのこのターマが使われています。つまりこの驚き、ターマは、決められた順番、すなわち神様の定めた「秩序」に対する驚きです。

イエシュアはニコデモに対して、神様の思い、ご計画によって定められた秩序を「不思議に思っ」疑ったり、拒絶したりしてはならないと語っておられるのだと考えられます。つまり誰が神の国に入り、そこでどのような者として扱われるかはすべて神様の主権と選び、要するに神様の独断であるということです。

3:8 風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」

風はその「思いのまま」に吹く。誰の思いでしょうか。風に人格や感情はありません。これは神様の思い、また考えです。御霊によって生まれる者、すなわち神の国を見る者は、上から、源から、つまり最初から、それも水と霊に表されるように天地創造の前から、神様のその思いのまま、考え、ご計画によって決まっていることが示されていると考えられます。そしてそれは肉は肉、霊は霊と話されたように、決して変わることはない、揺るがないご計画であることが語られているのです。これを信じ、受け入れるとは神様の主権性を認めること、全ては神様の「御心のままに」と告白し、そのような考えに基づいた生き方をすることであると考えられます。

主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」(出エジプト 33:19)

神様の天地創造の御業は、「光があれ」から始まっていますが、この光とは太陽や星の輝き、火や電気の明かりのことではありません。光はヘブル語でオール(אוֹר)といいます。神様ご自身を表す文字アーレフ(א)と、釘を象った文字ヴァーヴ(ו),そして頭を象った文字で、考え、思考を意味するレーシュ(ר)が組み合わさった言葉です。つまりオール、光とは、「初めに、神様が釘を刺した、釘を打ちこんで固定した、つまり決定した考え、思い」つまり決して変わることの



ない、揺るがない神様のご計画を表すものなのです。

#### 4. 拒絶

3:9 ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがありうるのでしょうか。」

3:10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか。」

3:11 まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。

神様を信じない者、信じていると言いながらも、神様の思いのまま、神様のご計画を受け入れず、自分の思いのまま、まさにわがままに生きている者には、イエシュアの言われることが理解できません。「どうしてそのようなことがありうるのでしょうか」あり得ない、信じられないと思われるのです。

3:12 あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。

イエシュアが話しておられるのは天上の話ではありません。この地上の話です。神の国が、御国がこの地上に来るとい話です。しかしニコデモはこれが理解できず、受け入れられず、イエシュアは彼に天上の話をする事なく会話が終了します。

#### 5. 天上の話

しかし筆者であるヨハネは、この後に天上の話を付け加えて記しています。ここから先は、ニコデモには明かされることのなかった天上の話として捉える必要があります。

3:13 だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。

天に上った者、つまり地上に存在する者で、天上を知る者はいないと言っています。しかし人の子すなわちメシアであるイエシュアは、初め天上におられた方なので、ニコデモには話されませんでした。天上を知り、その話をする事ができるお方だということです。

3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。

天から下った人の子すなわちメシアはまた再び上げられなければならない、つまり天に帰ることが記されています。その目的が、民数記 21 章に記された出来事、モーセが作った青銅の蛇に関係しています。

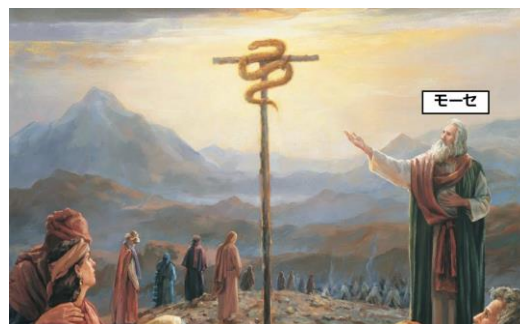
#### 民数記

21:7 民はモーセのところに来て言った。「私たちは主とあなたを非難して罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう、主に祈ってください。」モーセは民のために祈った。

21:8 すると、主はモーセに仰せられた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる。」

21:9 モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた。

イエシュアは人の子、すなわちメシアであるご自身をこの青銅の蛇にたとえられました。荒野で神様に逆らったイスラエル人たちは、神様が送られた燃える蛇の毒によって死の危険にさらされます。実際多くの者が倒れますが、モーセが神様に命じられて作った青銅の蛇を「仰ぎ見る」イスラエル人は死を免れました。つまりイエシュアを仰ぎ見るイスラエル人は救われるという神様のご計画が示されています。



なおこれはイエシュアの地上再臨において成就するしるしです。このヨハネ 3:13 からの内容は、ニコデモに明かされることのなかった天上の話です。ですからここは天上から再び降りて来られるメシア・イエシュアのことを表していると考えべきです。その目的は青銅の蛇の出来事に表されているように、神様に悔い改めた、立ち返った、つまりイエシュアをメシアとして受け入れたイスラエル人、ユダヤ人たちが生きるためです。彼らはその時初めてイエシュアを「仰ぎ見る」のです。

## 6. 仰ぎ見る

では「仰ぎ見る」とはどのようなことでしょうか。ここにはヘブル語でナーヴァト(נָוָה)という言葉が使われています。このナーヴァトの語源となる出来事はこれです。

そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」(創世記 15:5)



天を「見上げなさい」という箇所にもナーヴァトが使われています。ナーヴァトのもつ概念は「天を見上げる」です。そしてその目的は、神様がアブラハムに対して示された約束、ご計画を示すためでした。イエシュアをナーヴァトする、仰ぎ見るとはイエシュアの姿形を見るというだけではなく、イエシュアを通してなされる、完成される神様のご計画、すなわちアブラハムによって地上のすべての民族を祝福するという創世記 12

章に記されたあの約束、契約が果たされるのを「仰ぎ見る」ということです。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」(創世記 12:3)

## 7. 世を愛する

3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

聖書を代表する有名なみことばですが、注意して見ていただきたいのは、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを与えたいと、神様が愛しておられるのは、すべての人間、全人類ではありません。「御子を信じる者」イエシュアを信じる者だけです。イエシュアを信じる者はすべて救われます。つまり神の国を見る、御国に入ることができます。そしてそれは先ほど水と御霊、肉は肉、霊は霊というイエシュアの言葉に示されたように、天地創造の前から、ただ神様の思いのまま、神様の主権によって決定された、決して覆される、変更されることのないご計画だということです。これをしっかりと理解するためには「神は…世を愛された」という言葉の意味を正確に理解する必要があります。これはヘブル語でしか理解できない事実です。

まず「世を愛された」の「世」という言葉はオーラーム(עולם)という言葉で「永遠、永続、昔」という意味を持った言葉です。ですから「世を愛された」というよりもむしろ「永遠を愛された」つまり永遠に生きることを、永遠の世界を愛された、という意味がヘブル語的解釈です。決して今のこの世のことを指しているのではないことが解ります。



そして次に「愛する」という言葉についてですが、ヘブル語で「愛する」はアーハヴ(אהב)です。この言葉を構成する三つの文字が持つそれぞれの意味を見ることで、アーハヴの持つ本当の意味が見えてきます。



アーレフ(א)…雄牛を象った象形文字です。力ある方、神様を直接的に表す文字です。

ヘー(ה)…窓を象った象形文字です。見る、生きる(息をする)という意味があります。

ベート(ב)…家を象った象形文字です。家、国、国民など、神の国、御国を表す文字です。

これら三つの文字の持つ意味を組み合わせると「神の見る家」

「神が生きる家」すなわち神様が見る、VISION として見る家、神様が生きる目的、命をかけて完成させる家、それが神の国、御国である、という概念を持った言葉がアーハヴ「愛する」であり、私たちが抱いている愛の概念とは大きく違うことが解ります。

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。( Iヨハネ 4:8)

このみことばを正確に訳すならこうです。「アーハヴでなければ神はわかりません。なぜなら神はアーハヴだからです」つまり「神の建てる家、御国を見つめない者に神はわかりません。なぜなら神様は御国を見ておられるからです」となります。

今日教会で語られている愛は、世間一般に解釈されているものほとんど変わりません。聖書が、神様が本来提示しておられる愛の概念からは大きくかけ離れたものとなってしまうています。私たちは今、この愛につい

ての解釈を、全く改めなければなりません。つまり御国を建てようとしておられる神様のご計画に焦点を合わせた聖書解釈が、私たち教会には必要なのです。

このように、「神は…世を愛された」は、「神は…永遠の昔から、とこしえに御国を思い続け、それを建て上げ、そして治められる。そのために生きておられる」という意味であると考えられます。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。(マタイ 6:33)

## 8. 変化

御国を建て上げ、それを治める方、それが私たちが信じる神様です。ニコデモはこれを理解することができませんでした。彼はユダヤ人たちの指導者、当時のイスラエル人たちを代表する人物の一人でした。その彼が「どうして、そのようなことがありうるのでしょうか」つまり「そんなばかな、あり得ない、信じられない」と言ってイエシュアのみことば、すなわち神様のご計画を拒絶したのです。この時の彼の反応はまさに当時のユダヤ人たちの態度、またモーセによってエジプトから導き出された日から今日に至るまで、神様に逆らい続けているイスラエルの歴史そのものでした。しかし最後には、彼はイエシュアを信じ受け入れるのです。それはイエシュアが十字架にかかられて死なれ、その遺体をアリマタヤのヨセフとともに引き取る時の姿に表されています。

### ヨハネ

19:38 そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。

19:39 前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。

一度はイエシュアを拒絶したニコデモでしたが、この時の彼はイエシュアを受け入れていることを行いで示しています。このニコデモに見られる変化は、まさにイエシュアが再臨される時に、悔い改めて救われるユダヤ人たちを表していると考えられます。民族的なユダヤ人たちの回心、これがイエシュアの地上再臨、すなわち御国をこの地上にもたらす唯一の鍵です。



あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。』(マタイ 23:39)

このように、ニコデモという人物の中に、イスラエルの、ユダヤ人たちのイエシュアに対する拒絶とそして回心を見ることができます。神様はこれから後、ユダヤ人に起こることをニコデモの生き様の中に前もって表し

ておられるのです。まさにこのニコデモの名前の中に隠された動詞カーダム「先に、前もって～する」です。そして彼がニコデモという実名とともに記されていること、つまり実在の人物であるという記述に、ユダヤ人たちの回心、イエシュアをメシアと認め、「祝福あれ。主の御名によって来られる方に」と叫ぶ日が必ず来ること、そしてイエシュアが御国をこの地にもたらすために再臨されることもまた必ず実在、実現する、ということが表されていると考えられます。